

星を見上げる夜はあなたと

Nao & Subaru

桜木小鳥

Kotori Sakuragi



エタニティ文庫

目次

星を見上げる夜はあなたと	5
夏の星図に誓いの言葉	181
Sunny Day	291
書き下ろし番外編 星の指輪	335

星を見上げる夜はあなたと

幼いときから、夜空を見上げればいつでもそこに満天の星があった。漆黒の闇に瞬く無数の星。ずっと見ている見飽きない、永遠の輝き。その空が、当たり前だと思っていた、少女のころのわたし。見えないことの寂しさに気づいた、大人になったわたし。

重たい鞆と、商品サンプルがぎっしりと詰まった紙袋を両手に持つての外回り。会社に戻ったときにはすっかり疲れ果てていた。自分の机の上にドンと音を立てて荷物を置くと、隣の席から低い笑い声が聞こえる。

「すごい顔してるぞ、宮崎」

芸能人も顔負けの驚くほど整った顔に嫌味な笑みを浮かべ、同僚の伊勢谷が言った。「疲れてるんだから仕方ないでしょ」

ギロリと睨んで答えると、伊勢谷がまた爽やかに笑う。わたしと同じように、一日中

外回りをしていたはずなのに、まったく疲れた顔をしていない。それが余計にムカつく。

「もう若くないんだから無理するなよ」

「うるさいわね、ほっときなさいよ。あんただって同い年でしょ！」

伊勢谷の笑い声にイラッとしながら、鞆と紙袋の中身を整理し、椅子に座ってパソコンを立ち上げた。肩と首を回し、軽くストレッチをしてからキーボードを叩く。

宮崎奈央、二十八歳。

東京にでて来て早十年。大学卒業後、日用雑貨や衣類を製作販売する会社に入社し、以来営業部で忙しない日々を過ごしている。

実家は、瀬戸内海にある島だ。そこで民宿を経営している。四歳年上の兄が、会社勤めをしながら義姉とともに両親を手伝っていた。義姉は兄の同級生で、わたしとも子どもころからの顔見知りだ。

島の中で、わたしは常に優等生だった。せっかく勉強ができるのだからと、両親はわたしを高校卒業後、東京の大学に進学させてくれた。

意気揚々とおり立った都会で、わたしは初めて挫折を知った。島の中では一番でも、都会にでてみると、わたしも人ごみの一構成員に過ぎなかったからだ。

同じ大学なのだから、学力はそう変わらない。それならと、遊び回っている同級生たちを横目に必死で勉強をしても、それほど差は開かない。

現実を突きつけられた。井の中の蛙、大海を知る——
 プライドが変に高くて勝手に傷つき、凹んで、それでもこの都会で就職することを決めた。今度こそトップに立ってやると、わたしの負けず嫌いな性格がそうさせたのだ。今思えば、おとなしく地元に戻った方がよかったのかもしれないけれど……

「なーお！」
 突然呼ばれた声と同時に、背中から抱きつかれた。

「うげーっ」
 「……すっげー声だな、おい」

思わず呻き声を上げると、隣の席から伊勢谷が呆れたように言った。けれど、苦しくそれどころではない。

息ができない！と慌てて振りほどくと、同期で友人の遠藤一美が立っていた。ちなみに彼女は総務部所属だ。

「苦しいじゃない！」

喉を押さえたわたしを見て、一美があっけらかんと笑う。

「ごめんって。だって、声をかけたけど聞こえてないみたいだったんだもん」

悪びれることなくそう言って、空いた椅子を持って来てわたしと伊勢谷の間に座った。「ねーねー、今夜合コン来てくれない？ 一人足りなくなっってさ」

「行かない。合コンなんて嫌いだし、ましてや教合わせなんて、もっと嫌」

きっぱりそう答え、パソコンに向き直る。さっきの衝撃でタイプミスした部分を削除する。

「言うと思ったけどさー。あんたの飲み会嫌いは知ってるし」

気分を害した風もなく一美が笑う。知ってるなら誘わないで欲しい。

「でも今日の相手は商社マンよ。チャンススチャンス」

「なんのチャンスよ。そんなことより早く早く帰って寝たいわよ」
 いらんと言いながら、キーボードを叩く。

「もー、色気ないわねえ。もっとと人生を楽しみなさいよー」

一美が椅子に座ったまま、ぐいぐい来るけど無視する。言われている意味はわからなくもない。恋愛事から遠ざかって、もう何年になるんだか。でも、仕事がハード過ぎて、色恋に回せる気力がないのだ。

「遠藤、あんまり言うなよ」

ふいに伊勢谷が口を挟んだ。手を止め、一美と一緒に彼を見る。すると、随分と楽しそうな顔をしていた伊勢谷が、妙に真面目な表情になった。

「宮崎はもう歳なんだよ、疲れてるんだから休ませてやれよ。からだは労らないと」

「だからあんたも同い年でしょー！」

食い気味に文句を言うのと、頷いた一美が伊勢谷をビシッと指さす。

「そうよ、わたしたちがおばさんなら、あんたはおっさんよ！」

「誰もそこまで言っていないだろ」

呆れ顔の伊勢谷を無視して、一美が立ち上がる。

「もういいわ。じゃあ、また今度飲みに行こうね」

わたしの肩をぽんと叩いて、彼女は営業部からでて行った。

「あいつの耳、どこかおかしいんじゃないのか？」

伊勢谷がやれやれ、という調子で言った。そこはまあ頷けなくもない。彼女はいつでも前を向いて走っている感じだ。その裏表のない性格はつきあいやすく、今ではわたしにとって、唯一の友人でもある。

「今のはあんたが悪いの！」

「本当のことなのに……おわっ、いてっ」

脚を伸ばして伊勢谷の椅子を蹴ってやった。伊勢谷が椅子から落ちそうになったのを見て、べーっと舌をだす。

「お前、危ないだろっ」

「さー、仕事仕事」

怒る伊勢谷を無視して、パソコンに向き直った。

終業時間をだいぶ過ぎて、ようやく仕事が終わった。なぜか同じタイミングで伊勢谷も帰り支度をはじめ、どういうわけか二人で駅まで歩くことになった。

秋が終わりに近づき、外は冬の空気を纏いはじめている。夜ともなればすっかり冷え込んでいた。わたしは小さく身震いして、ジャケットの前をぎゅっと握る。そして、わたしよりも二十センチほど背の高い伊勢谷をちらりと見た。

伊勢谷と一緒にいると、なんとなく落ち着かない。息を呑むほどの見た目のよさのせいか、あらゆる人間の視線がヤツに集まっているのを目の当たりにするせいか。はたまた営業部に配属されて以来、常に成績トップに君臨し続けているヤツを羨んでいるためか。

どちらにせよ、居心地が悪いことは確かだった。そんなわたしの思惑など知らないとはかりに、伊勢谷はわたしを構って来る。同期の気安さだろうか。

「今週も疲れたな」

疲れなんて微塵みじんも感じさせない表情で伊勢谷が言う。

「そうね」

こっちはもう本当にガタガタよ。脚が浮腫むくんでパンパンになっているので、一刻も早く家に帰って靴を脱ぎたい。いや、今すぐ脱ぎたい。

駅までの道は、大勢の人が行き交かっている。ふと見上げると、ビルの間から夜空が見

えた。都会の明かりに照らされたそこには、星一つない。——だから東京の空は嫌いだ。見えない星空に、息を吐く。そのとき、視界の端に伊勢谷の顔が見えた。ヤツはわたしを見て笑っている。

「なによ？」

「いや。相変わらずだなと思って」

なにもかも見透かしたような表情に、伊勢谷が完璧な男だということを思い出した。外見も内面も、そして記憶力も、彼は完璧なのだ。

伊勢谷という人間は完全体で、そしてそれは、わたしが望んでいた姿そのもの。だからわたしは、伊勢谷が嫌いだ。

駅の改札で伊勢谷と別れ、週末の混んだ電車に乗り込んだ。座席とドアの角にある空間にからだを滑り込ませ、ため息をついて目を閉じる。頭の中にさっきの伊勢谷の顔が浮かび、過去の記憶が蘇って来た。

今から六年前、新入社員のわたしが希望した部署は、営業部だった。目に見えて成績がわかるし、小さなころから民宿の手伝いをしてきたから、人と接する仕事は得意だ。

自分で言うのもなんだけど、見た目だってそんなに悪くない。昔から才色兼備な宮崎奈央として通っているのだ、なんてね。

目はぱっちり二重。鼻は高からず低からず。唇の形だつて悪くない。普段はまとめている髪の毛は、セミロングの長さをキープ。背は百六十センチを少し超えたくらいだ。

まあ、取りたてて武器になるものがないと言えなくもないけれど、弱点らしき弱点はない。新入社員は数人のグループにわかれ、二週間の研修の後、それぞれの部署に配属されることになっていった。花の営業部に配属された暁には、誰にも負けなくらい優秀な成績を取つてやると意気込んでいたそこで、わたしは星の名前を持つ男に出会った。

「今日から二週間、よろしく」

端正な顔で屈託なく笑つたその男こそ、伊勢谷昂だったのだ。

くつきりとした二重の切れ長の目、すつと通つた鼻すじと薄い唇が完璧なバランスで配置されている。名前の通りきらびやかで、十数人いる新入社員の中でも——いや、社内でも、飛びぬけて整つた顔をしていた。大勢の女子社員があらさまに彼に見惚れ、誰もが素敵な人だと思つただらう。わたしだって最初はそう思つた。

「同じ班になったよしみだ。仲良くやろうぜ」

端正な顔に似合わない少し碎けた口調に、人懐っこい笑顔。それがさらに彼の魅力を増していた。

けれど、そのほのかな想いが嫉妬に変わるまで、そう時間はかからなかった。

伊勢谷は、新人研修でなにをやらせてもそつなくこなした。企画、衣服のたたみ方に

商品の梱包こんぱう、どれをとつても、伊勢谷にできないものはなかった。

同じ班になったわたしも必死に頑張つて、高評価をもらった。でも伊勢谷はいつも、わたしの一歩前にいた。

「よし、完璧！」

プレゼントの梱包練習。仕上がりに満足して、上司のOKもでたのに——
「いいな、それ。で、もうちょっとこうすれば……」

伊勢谷が少しだけじつただけで、さらに華やかになった。上司もびつくりだ。一事が万事、そんな感じ。でも、彼はいつも言うのだ。憎らしいくらいに笑みを浮かべて、

「すごいな、宮崎」と。

嫌味いやみでもなんでもなく、伊勢谷はただ純粹に感嘆の声を上げる。できることを鼻にかけるわけでもなく、謙遜けんそんするわけでもない。誰かが失敗しそうになったときにはさりげなくフォローし、見事な結果を導きだす。そして伊勢谷はみんなに一目置かれ、尊敬され、憧れのまなざしを向けられるようになっていた。

わたしが望んでいたものすべてを、伊勢谷昂たかは持っていた。それも、わたしよりもずっとずっと優れた形で。

伊勢谷は一番星だ。暮れかけた空に、一番最初にキラキラ輝く明るい星。その光は強過ぎて、わたしの光なんてかき消されてしまいそう。
でも、違う部署になれば、わたしが一番星になる可能性はまだあるはず。
なんて、強気だか弱気だかわからない決意を、神様がまともに取り合ってくれるはずもなかった。

新人研修が終わった翌週、わたしと伊勢谷は同じ営業部に配属になった。同期の女子には羨ましうらやましがられたけれど、正直代わって欲しいくらいだ。確かにわたしは、営業にいきたくとずっと望んでいた。でもそれは、伊勢谷の存在を知らなかったときの話。
「よろしくな、宮崎」

営業部で机を並べ、伊勢谷が笑った。完璧な笑顔だ。それが驚くほど眩まぶしく、わたしはなにも言えなかった。

伊勢谷には、当時の営業成績トップだった先輩が指導担当についていた。それはつまり、会社からかなり期待されているということ。わたしを教えてくれた先輩も優秀な人ではあつたけれど、トップではない。出だしから伊勢谷に先を越された。

正直ものすごく悔しかった。だから、わたしはそのとき、伊勢谷に勝つために努力を惜しまないと密かに決意したのだ。伊勢谷を一方的にライバル認定した瞬間だった。

先輩とともにいきいきと動き回る伊勢谷を視界の端にとらえながらも、わたしも必死になって仕事を覚えた。

「すごいな、宮崎。女性の新人でここまでできるヤツはめったにいないぞ！」

「ありがとうございます、先輩！」

おかげで、上司からも先輩からも一目置かれるくらい成長することができた。でも、伊勢谷はわたしのさらに上にいた。

「伊勢谷が契約取ったって！」

「新人が単独で契約を取るなんて初めてじゃないか!？」

あのときの騒ぎは今でもよく覚えている。

わたしとは格が違う、優秀な伊勢谷——。それでも、わたしはなんとしても一番上に立ちたかった。そのためにはもっと努力しなければ、と思ったものだ。

ちなみに、その努力は六年経った現在も絶賛継続中だ。おかげで常にいい成績を取り続けているけれど、やっぱり伊勢谷には及ばないのだ。

「ああ、やだよだ」

ため息をつきながら最寄り駅であり、駅前のコンビニに寄ってから帰宅する。帰り道、自然と見上げた空には、星が一つだけ見えた。

わたしの実家の前には、海がある。夜になると、海と空の境界線もわからない、漆黒の闇が広がる。空にはいつでも満天の星。数えきれないほどの星が、ちりばめられた宝石のように闇の中で輝くのだ。吸い込まれそうなその星空をずっと眺めることが、わた

しの至福の時間だった。

何光年、何万光年彼方^{かた}から届くわずかな光。

それを見ながら、何度宇宙の果てに思いをはせたことか。そのころの気持ち^{かた}が、まだわたしの中に残っているのだろう。何年も宇宙空間をさ迷っていた小型探査機の帰還ニュースに感激し、大気圏で燃え尽きる映像を見て涙してしまった。でも、それは誰にも内緒だ。バリバリ仕事をこなすキャリアウーマンとみなされているわたしに、そんな弱いイメージは不要なのだ。浮いた話一つなく、強気で仕事にしか興味がないと思われている——それが今のわたしなんだから。

2

休日は用事がない限り、朝寝坊すると決めている。一週間の疲れは一晚寝たくらいでは取れない。しかもその疲労の蓄積感^{けいちき}は、年々顕著^{けんちやく}になっていった。伊勢谷に言われるとムカつくけれど、やっぱり年齢のせいなのかもしれない。二十代後半でこれでは、この先のことを考えるとすら寒くなって来る。

なんとか布団から起き上がり、すでに明るい部屋の中を見回した。1Kの部屋に家具類はあまりなく、まあまあ片づいている。散らかるほど部屋にいないからだ。

「今日は掃除はしなくてもいいかな」

一人つぶやき、部屋の隅にまどめていた洗濯物をかき集め、洗濯機を回す。その間に朝食用に買ったサンドイッチを食べ、こたつに入ってぼーっとテレビを眺めた。

東京に住んでもう十年になるのに、テレビや雑誌で見るような、おしゃれで都会的な生活を送ってはいない。恋人がいたころは多少違っていたけれど、それも短い時間だ。残念ながら、一人の時間の方が遥かに長いのが現実。

洗濯物を外に干し、一息ついたところでインターホンが鳴った。実家から大きくて重い荷物が届いたのだ。

「ありがたや、ありがたや」

そう言うって段ボールを開けると、一番上に封筒が乗っていた。それを一旦こたつの上に置き、その下にある沢山のビニール袋を開ける。中に入っていたのは、お米、お味噌、海苔と佃煮、タマネギとにんじんとじゃがいも。それから、なんだかオバサンっぽい肌着。これは母が通販で買っているものだ。一、二ヶ月に一度届くおなじみのラインナップは、都会で一人暮らしをしている身には有難い仕送りだ。

食料品を片づけ、肌着はクローゼットの中の衣装ケースに仕舞う。ついでにお湯を沸かして、温かいお茶を淹れた。十一月ともなると、部屋の中でも結構冷える。

こたつに入り、除けておいた封筒を開けた。中にはさらに封筒が二通入っていた。一

通は母からの手紙だ。内容は毎度変わらない。向こうの近況、こちらの様子を伺う言葉、そして、頑張って下さいの文字。

もう一つの封筒には、兄夫婦の子どもたちの写真が入っていた。甥の哲弥が七歳、姪の千香が五歳。二人とも先月が誕生日だったので、プレゼントを贈ったのだが、そのお礼らしい。

「ふふ、可愛い」

おもちゃを前に満面の笑みを浮かべる二人の顔に、うれしくなる。手紙を開くと、拙い文字が並んでいた。そこにも「おしごとがんばって」という言葉を見つける。

その言葉はわたしにとって、時々とても重たい。

「ちゃんと頑張ってるってば」

ため息をつき、お茶を一口飲んでスマートフォンを手取る。アドレス帳から実家の番号を探してタップすると、しばらくして母の声が聞こえた。

「あ、お母さん。奈央やけど」

普段は一切でない土地の言葉が、すらりと口からでて来る。

「奈央、元気？ 荷物届いた？」

「うん、ちゃんと届いたよ。いつもありがとう。哲と千香にもお礼言っというて」

『わかった。だいぶ寒なって来たから、ちゃんと温かくするんよ』

「うん」

『仕事は？ 営業いうんは忙しいんやろ？』

「まあね」

『無理せんと頑張りや。でもほんま、お母さん誇らしいわ。この前もお客さんに、娘が東京の大学をでて東京で働いてるって言うたら、すごいですなえって言われたんよ』

「そう」

母の声は、いつも通りうれしそうだった。母の中でわたしは、誰にも負けない優秀な娘のままなのだ。

でもね、お母さん。そんな人間、東京には数え切れないくらいいるのよ。

喉まででかかった言葉を呑み込み、当たり障りのない会話をして電話を終えると、一気に疲れが押し寄せた。

実家の家族を懐かしく思わないときはない。荷物が届けばありがたいし、声を聞けばうれしい。それでも、かけられた期待の大きさに、時々押しつぶされそうになる。

お母さん。残念ながらあなたの娘は、それほど優秀ではないのです。本当に優秀というのは、あの男のような人のことをいうのだから。

外見も性格も頭脳も、なにもかも完璧な伊勢谷。同期の中で一番近い位置にいて、誰よりもわたしの劣等感を刺激する男。そして、わたしの密かな趣味でさえ、ヤツは知っ

ている。

それを思い出すと、いつも胸がざわつく。弱みを握られてような感覚になるのだ。

「あーやだやだ。せっかくの休日になんか暗くなるなんて。買い物にでも行こう」と
気持ち切りかえるため、勢いよく立ち上がり、コートを羽織った。

伊勢谷にわたしの趣味を知られたのは、配属から二週間後の週末に行われた、営業部の新人歓迎会のときだった。

みんなで居酒屋に移動する途中、ふと空を見上げた。空を見るのは、わたしの癖のようなものだ。都会のビル群の間から見える夜空は本当にわずかで、どんなに目を凝らしても星一つ見えない。本当なら、無数の星々がそこにあるはずなのに。

「なにを見てんだ？」

そのとき、いつの間にかわたしの隣を歩いていた伊勢谷が言った。痛くなるほど空を見上げていた首を戻し、背の高い伊勢谷に視線を合わせる。

朝は軽く整えられていた髪が、今は少し崩れている。それでも、伊勢谷の男前が損なわれることはない。天は二物を与えずなんて嘘だということを、この男は体現していた。こんな伊勢谷だけど、現在恋人はいない。そんなこと興味なかったけど、女子社員の間で伊勢谷の話題が絶えなかったので、勝手に耳に入ってきたのだ。

「星よ。でも見えないの」

そう答えたわたしに伊勢谷がなにか言おうとしたとき、目的の店に到着した。そのまま押されるように店に入り、新人だからと伊勢谷と二人で上司の近くに座らされた。

大学時代は、バイトと勉強に明け暮れていたから、大勢の飲み会の経験はほとんどない。先輩たちと緊張しながらも和気藹々^{わきあいあい}と話し、勧められるままにお酒を飲んでいたらすっかり酔いが回ってしまった。

最初は意識していた隣の伊勢谷が気にならなくなったころ、その伊勢谷がわたしに話しかけて来た。

「さっきの続きだけどさ」

「えっ？」

賑やかな声に紛れてよく聞こえない。頭を少しだけ伊勢谷に寄せる。

「星のこと。興味があるのか？」

伊勢谷も同じように頭を寄せたので、髪の毛の先が触れ合った。ドキッとしてしまったのは、きつとお酒のせいに違いない。

「見るのが、好きだけ」

なんとなく、癒やされているとは言いたくなかった。あの懐かしい星空にいつでも焦がれていることは、この同期には知られたくないと思っただけだ。伊勢谷の前で弱音を吐

くことになる気がして――

「意外だな」

伊勢谷が面白そうに笑う。詳しく言わなくてよかったと思いつつ、なんだか少しカチンと来た。意外ってなによ、意外って。わたしのこと、なにも知らなくせに。

「東京の空は、星が全然見えないからつまらないわ」

お酒の勢いもあってヤケになって答えると、伊勢谷がまたクスッと笑った。

「宮崎、出身はどこ？」

瀬戸内の島の名を答えると、彼はふむと頷いた。

「なら、物足りないだろうな」

そう、物足りない。心の中で頷き、グラスに半分入ったビールをじっと見つめる。

「プラネタリウムに行ったことあるか？」

伊勢谷がふと言った。顔を上げてヤツの顔を見る。

「東京は本物の星はあんまり見えないけど、プラネタリウムは結構あちこちにあるんだ。行ったことは？」

もちろんないし、今の今までそんな発想もなかった。ふるふると首を振り、出会って初めて伊勢谷に感謝した。

そうだ、プラネタリウムなら本物じゃないけど星が見られるじゃないか。どうして今

まで気づかなかったのか、自分で自分を責めなくなった。早速調べてみようと思ったそのとき――

「じゃあ、いつそ二人で天文部でも作るか。星を見る会。ってのもいいかな」

「……えっ、なんで二人？」

一瞬胸がドキッとした。

驚いているわたしに、伊勢谷が笑いかける。

「一人で見るより楽しいだろ」

思わず息を呑むほど眩しい笑顔を向けられ、とっさに言葉がでなかった。

「待ってろよ、色々計画してやるから」

「いやいや、そっちが待ちなさいよ」

言いかけたわたしを、伊勢谷が制する。

「まあまあ、任せとけて」

「え、待ってよ！」

反論する間を与えず、伊勢谷はさっさと向きを変えて上司や先輩たちとまた盛り上がりはじめてしまった。残されたわたしは、一人悶々とする。

そのあと伊勢谷との会話はなま飲み会が終わり、当時住んでいたワンルームのアパートにふらふらと帰った。布団に入ったときには釈然としなかったけれど、翌日ガン

ガン鳴る頭を抱えながら振り返ると、あれは酔っ払いの戯言に違いないと思えて来た。

日曜日にそれが確信に変わり、月曜日には、そんな話があったことさえ忘れてわたしは出勤した。ところが、そんなわたしの顔を見るなり、伊勢谷が言ったのだ。

「金曜日の夜、空けとけよ」

「え、なんで？」

「星を見る会、第一回目の活動だから」

「は？」

「ちゃんと定時に終わるように調整しろよ」

哑然としていたわたしを残し、伊勢谷はさっさと外回りに行ってしまった。

その週はわたしも伊勢谷も忙しくて、日中は全然会社になかった。同じ部署とはいえ、ゆっくり話すどころではない。結局、伊勢谷とほとんど話せないまま当日を迎えることになった。

「ほら、行くぞ宮崎」

終業時間を過ぎ、わたしがようやく報告書を書き終えたタイピングで伊勢谷が言った。当たり前のことを告げるようなあっさりした口調に、思わずぼかんとする。そんなわたしに、伊勢谷が呆れた顔を向けた。

「おい、記念すべき活動開始日を忘れたのかよ」

「わ、忘れてないわよっ」

ちよつとムカついて言い返す。悔しいけど、実は結構楽しみにしてたのだ。だって、久しぶりに沢山の星が見られるんだから。伊勢谷と一緒にいるのがまだ解げせないけど、大学と今の職場と自宅付近しか知らないの、いい案内係だと思ふことにした。

家に帰るのは違う電車に乗り、週末で混雑する駅でおりた。都会の繁華街を二人で歩く。

「どこに行くの？」

「一番メジャーなところ」

そう言いながら、伊勢谷が大きなビルの中にあるエレベーターに乗り込んだ。

「こんな時間までやってるの？」

「最終は夜の九時だ。先にチケットを買って、飯でも食うか。腹減ったし」

直通のエレベーターはあつという間に屋上に着いた。おりたら目の前に水族館があつて、さらに驚く。

「宮崎、こっち」

振り返ると、伊勢谷がプラネタリウムのチケットブースの前で手招きしている。慌てて彼に駆け寄った。

「時間、どうする？ 飯食いたいから、八時のでもいいか？」

今が十八時過ぎだから、そんなもんだらう。頷くと、伊勢谷が窓口に向かった。

「あ、お金」

お財布をだそうとしたら、伊勢谷が手を振った。

「いいって。記念すべき一回目なんだから。部長の俺がだしてやる」

……部長って。

「あ、ありがと」

窓口で採めるのもなんだし、とりあえずお礼を言って引き下がる。

チケットを買った伊勢谷とまたエレベーターで下までおりて、食堂街を歩いた。週末のご飯時でどこも結構混んでいたから、入ったのは結局ファストフードだ。

そのときの食事代はわたしが払った。伊勢谷は渋ったけれど、二人分を払ってもプラネタリウムのチケット代には及ばない。

当たり障りのない会話をしながらハンバーガーを食べ、開始二十分ほど前に店をでた。エレベーターに乗りまた屋上に上がる。プラネタリウムの前には、すでに列ができていた。

「この時間でも、結構混んでるのね」

「だな」

金曜日の夜ということもあるのか、ほぼカップルだった。その中で、伊勢谷は平然とした顔をしていた。そのうち、女性の視線が彼に集まる。

もしかしたら、わたしと伊勢谷もそういう風に見られているのかしら？

——あるわけないか。

一瞬でもそう考えた自分に、我ながら呆れてしまう。

同じ仕事をしているのに、仕事帰りでくたびれているわたしと違い、伊勢谷は雑誌から抜けでて来たようにキラキラしていた。

どう考えても、わたしと彼はつりあわない——

その事実は、思った以上にわたしの心にぐざりと刺さった。

開演十分前に扉が開き、列が動きだす。伊勢谷はさっさと歩いて、後方の真ん中に席を取ってくれた。

「実は俺も久しぶりなんだ。楽しみだな」

伊勢谷が椅子を倒したので、同じように座席を思いっきり倒す。ふと隣を見ると、間近に伊勢谷の顔があつて、図らずもドキドキしてしまった。そんな自分に驚く。わたしは自身を誤魔化すように、あえて強気な調子で言った。

「さあ、思いつきり楽しむわよ！」

「ああ」

伊勢谷の低い笑い声を聞きながら、視線をスクリーンに移す。ほどなくして室内の明かりが落とされた。球状の画面にいくつかの広告が映されたあと、音楽とともに一面に

星が光りだした。吸い込まれそうな漆黒しっこくの闇に、懐かしい天の川が浮かび上がる。

東京では見えない、無数の星。そして日本では見えない南十字星。宇宙から届く小さな光は、わたしの中で大きな力になる。

終わった後も、しばらくスクリーンを眺めていた。久しぶりに見た星。実物の方がいいのは当然だけど、それを見ることが難しい今の状況では、最上の星空だった。

ささくれていた心が落ち着いた。やはり、星を見ることはわたしにとって癒やしなのだ。「大丈夫か？」

低い声がすぐ近くで聞こえたと同時に、伊勢谷がわたしの顔を覗き込んだ。伊勢谷の瞳の中に星が見えた気がして、思わずじっと見つめる。と、それは室内灯の光だと気づいた。

「あ、ごめん」

我に返って視線を外し、立ち上がる。軽くからだを伸ばし、出口に向かった。

「なんか、久しぶりに感動したな」

ビルをでて、駅に向かう途中で伊勢谷が言った。金曜日の夜だからまだ人が多い。人ごみを縫うように歩く伊勢谷に合わせる。

「そうね。本当にきれいだっただ。連れて来てくれてありがとう」

星を見たおかげで、いつになく素直にそう言えた。いつもと違う態度に驚いたのか、

伊勢谷はわたしの顔をまじまじと見つめた。

「なによ？」

「いや。また行こうぜ。今度は別の場所にしような」

伊勢谷が笑顔になって言った。

『今度』という言葉に、次も二人で？ とか、なんでこいつと、とか思いながら、それでも領いてしまった自分にまた驚く。そのとき、出しぬけに声をかけられた。

「やっぱり。伊勢谷くんと宮崎さんだ」

伊勢谷と並んで振り返ると、会社の同期の女の子が三人いた。飲み会の帰りだろうか。みんな少し顔が赤く、そしてハイテンションだ。

「やだ、二人してどうしたの？」

「仕事？」

……矢継ぎ早やつぎばやに聞かれたけど、ここで『デート？』と言われないのはなぜだろう？

「プラネタリウムに行つて来たんだ」

伊勢谷は平然と答える。

「えーっ、伊勢谷くんってそんな趣味があつたの!? ……どうして宮崎さんと？」

「ね、宮崎さん？」

彼女たちが目を見開き、一斉にわたしを見た。

いや、そんな目で見られても。

「天文部を作つたの。伊勢谷が」

その一環で……と言葉を濁す。

女の子たちは目を丸くして、今度は伊勢谷を見た。

「まあ、そういうこと。メンバーは今のところ俺と宮崎だけけどな」

伊勢谷が苦笑いを浮かべて言う。

彼女たちは三人で顔を見合わせ、揃って領いた。

「ねえ、わたしたちも入れてよ。大勢の方が楽しいでしょ？」

大勢でプラネタリウムを見てどうすんのよ。そんなのただの遠足じゃない——。そう思ったけれど、とても言える雰囲気ではない。

しかも、彼女たちは伊勢谷ではなく、わたしに聞いて来た。こんな視線を一斉に浴びて、ここでNOと言える人間がいたらぜひともお目にかかりたい。

「もちろん」

なんとか領くと、彼女たちは「やったー」と声を上げて喜んだ。伊勢谷が少しだけ肩をすくめた気がしたけど、そうしたいのはわたしの方だ。

「じゃあ、今度さ——」

彼女たちが伊勢谷に今後の提案を始めるのを、わたしは冷めた目で見ていた。

伊勢谷のまんざらでもないような応対に、誰でもよかつたんじゃないの？ という思いが沸きおこる。一緒に遊んでくれるなら、誰でも。

みんな一緒に駅に向かい、一人路線が違うわたしだけが別の改札に向かう。

「またな」

別れ際に伊勢谷が言った。手を上げてそれに応え、楽しげな女の子たちの声を聞きながら、わたしは人ごみに紛れた。

その後、伊勢谷が作った星を見る会[☆]は同期や先輩を含め、あつという間に人数が増えていった。何か所かプラネタリウムを見て回ったけれど、やっぱり大勢で活動するのは難しく、それぞれの仕事も忙しくなって来たこともあって、いつの間にか会は立ち消えた。

その間に、伊勢谷はどんどん成績を伸ばし、入社三年目には営業成績のトップに立っていた。伊勢谷はますます輝く星になり、わたしとの距離はひらく一方だ。

星が好き、というのは決して恥ずかしいことではない。だけどなぜか、伊勢谷に知られたことが嫌だった。都会になじめず苦労している、と思われそうで……

なんてのは、わたしの勝手な思い込みだろうか。

3

あつという間に週が明け、月曜日。

ダラダラ過ごした週末のおかげで疲れは取れたけど、やっぱりすつきりはしていない。こんなときは、星を見るに限る。きっかけが伊勢谷というのが気に入らないけれど、実はあれ以降、わたしはたびたび一人でプラネタリウムに行っている。映しだされたものとはいえ、やはり和むものは和むのだ。

週明け早々だけど、帰りにプラネタリウムに寄って帰ろうと決意して、わたしは通勤電車をおりた。

会社への道を歩き、沢山のひとともに巨大なオフィスビルに吸い込まれるように入る。会社は十階と十一階のフロアにあつて、営業部は十階だ。エレベーターをおりると、ホールに置かれたショーウィンドウに自社製品がずらりと並んでいる。

そこには、女性向けの可愛い雑貨が新しく追加されていた。それらを一つ一つ見ながら、担当している店舗のディスプレイを考える。営業先の商品の陳列も、わたしの仕事の一つだ。効果的に並べてもらうよう、店側にアドバイスをすることもある。

受付を通って、一番手前にある営業部の部屋の扉を開けた。そこはまだ薄暗く、誰も来ていないようだ。部屋の電気と暖房をつけて自分の席に向かう。鞆かばんを机の下に置いて、パソコンの電源を入れた。立ち上がる間に、給湯室の湯沸しポットに水を入れてセットする。

ふと、部屋の壁を見た。諸々のスケジュール表の隣に貼りだされているのは、後期の営業成績表だ。凸凹でこぼこした棒グラフの中で、常に群を抜いて高いのは伊勢谷。わたしはその中で二番手にいるけれど、伊勢谷との差は大きい。それはここ数年間、ほぼ変わらない。でも、それももう終わるはず。わたしが夏ごろから営業をかけている案件が、ここに来てようやくまとまりつつある。本契約となれば、かなりの大口になる予定だ。そうすれば、わたしと伊勢谷の差はなくなる。いや、確実に追い抜ける。ライバルだと定めて六年目にしてようやく、ヤツの上に立つことができるのだ！

「今に見てなさい！」

グッとこぶしを握り席に戻ると、それとほぼ同時に、伊勢谷が出社した。

「おはよ。今日も早いな、宮崎」

わたしの隣の席にどかっと座る。なぜか、伊勢谷とわたしの席は隣同士のまんまだった。

「おはよう」

一応返事をしてメールチェックをする。とりあえず急ぎの用事はなさそうだと息を吐

いたとき、クスツと笑い声があった。思わず眉を寄せて隣を見ると、やっぱり、伊勢谷がニヤニヤしてわたしを見ていた。にやけた顔なのに、なまじ整っているせいでそう見えないのが腹が立つ。

「なによ？」

「別に。月曜の朝から難しい顔してんなんて思ってた。そろそろしわが目立つ年ごろなんだから、気をつけろよ」

「うるさいわね！ ほっといてよ」

誰のせいだと思いつつ、叩くようにキーボードを打って必要なメールの返事をする。

伊勢谷が笑いながらパソコンの電源を入れ、同じようにメールチェックを始めた。

「週末はちゃんと休めたか？」

パソコンに顔を向けたまま、伊勢谷が言った。

「おかげさまで。ドラドラ過ごして、二日間を無駄にしたわ」

わたしもヤツの方を見ないまま答える。

「無駄じゃないだろ。本当に必要なだからそうしてるってだけで」

思わず手が止まった。こういうとき、伊勢谷は意地悪なのか優しいのかわからなくなる。ムカつくことに、伊勢谷は入社したころと変わらず、今でも腹が立つくらいいい男だ。相変わらず女性には呆れるほどモテるけれど、未だ恋人はいないと本人が公言している。

いないはずはないと思うので、多分隠しているのだろう。その証拠に、用事があるとかで飲み会に参加しないことが多々あった。

恋人の話を彼に振らないのは、自分にもその反動が来るからだ。わたしの恋愛事情につっこまれると困ってしまう。

学生時代に少しの間つきあっていた人はいたけれど、就職してからはいない。

配属当時に、指導してくれた営業部の先輩に告白されたことがあったけれど、そのときは伊勢谷に負けないように仕事するのに精一杯で、余裕がなくて、結局お断りしてしまつた。とてもいい人だったし、優しくしてくれてもいたから、断るのは心苦しかった。それから指導係であることは続いていたので、色々気まずかったこともあり、しばらくして彼が転職になったときは、正直ホッとした。

恋人も作らず仕事に没頭していると、時々寂しくなる。でも今の自分にはこれが精一杯だ。

そんな本音を彼に言うことなんて絶対にできない。

もやもやしている間に、他の社員がぞくぞくと出勤して来た。

「おはよう」

「おはようございます！」

全員が揃つたところで営業部の及川課長おいかわが月曜日恒例の朝礼を始めた。

及川課長は一見のほほんとした普通のおじさんに見えるけれど、実はかなりのやり手営業マンだ。新人だった伊勢谷を指導した人でもある。そのあと着実に昇進して、現在に至る。

短い朝礼が終わり、わたしは外回りに持っていく資料やサンプルを揃え、紙袋に詰め込んだ。立ち上がって、椅子の背もたれにかけてあったコートを着ると、同時に伊勢谷も立ち上がった。営業車の鍵を手に、エレベーターに向かうタイミングも同じ。

ビルの地下にある駐車場で、空気が冷たくて思わず身震いする。そろそろマフラーが欲しい。

「また一段と寒くなって来たな」

眉間に少しだけしわを寄せ、隣に立っていた伊勢谷が言った。

「やるよ。お互いに頑張ろうぜ」

いつの間にか買ったのか、伊勢谷から温かい缶コーヒーを渡された。

「ぜーったい負けないもんね！」

颯爽さつさうと車に向かって歩きだした伊勢谷の背中に向かって思いっきり舌をだすと、背を向けたまま伊勢谷が手を上げた。どうやら聞こえたみたいだ。温かい缶コーヒーを握りしめ、冷たい空気をいっばいに吸い込み、わたしも自分の車に向かった。

営業は電車で行くこともあれば、車で回ることもある。都内の運転は最初は緊張した

けれど、今では慣れたものだ。午前中は現在商品を置いてもらっている店舗を回り、新商品のパンフレットとサンプルを配った。お昼は手近なファストフードですませ、また車を運転して本命の会社へ向かう。目指すのは、私鉄の本社ビルだ。

最初に営業をかけたのは、駅の構内にある小さな雑貨屋だった。ちょうどそのころ、その私鉄全線で大がかりな駅ビルの再開発が決定していて、タイミングよくその担当者を引き合わせてもらえたのだ。ここまでの手ごたえは悪くない。うまくいけば、今後主要な駅すべてに建設される駅ビルの店舗に、商品を置くことができる。

この契約がまとまれば、間違いなく営業部内でトップに立てる。

来客用の駐車場に車を止め、深呼吸して入り口をくぐる。受付で担当者の名前を告げると、すぐに会議室に案内された。そこで持ってきた資料を取りだしていたら、中年の男性が入って来た。担当の後藤さんだ。

「今日は冷えますね」

後藤さんは片手に書類を抱え、飲み物の入ったカップを乗せたお盆を持ったまま、部屋の空調を調節した。

慌てて駆け寄り、お盆を受け取る。

「ああ、すみません」

へへっと笑うと、人のよさそうな笑顔になる。

後藤さんはうちの及川課長と同年代の穏やかな人だ。だけど駅ビルのテナント関係を総括している部署の偉い人だから、やり手なのだろう。

「お忙しい中、お時間をいただきありがとうございます」

「こちらこそ、何度も足を運んでいただいて」

どうぞ、と温かい珈琲（ドリップ）を勧められ、一口飲む。それから、持って来た書類を広げた。現在の売れ筋と駅を利用する購買層の関係、雑貨店の必要性と店舗のイメージなど、なるべくわかりやすく説明した。

後藤さんは資料を丁寧に見て、うんうんと頷いてくれている。

「この資料とイメージはいいですね。上の方々にもわかりやすい」

「ありがとうございます」

こう言ってもらえると、残業して作った甲斐（かい）があったというもの。

後藤さんがわたしを見てにこりと笑った。

「明日の午前中に会議がありますね。この資料を提示したいと思います。何事もなければ、そこで正式に決定します」

「は、はい」

ああ、いよいよだ。緊張のあまり、ごくんと唾を呑み込んだ。そんなわたしを見て、後藤さんがまた笑う。

「宮崎さんが熱心に通ってくださいだったので、ほくも心してプレゼンしますよ」
「よろしく願います！」

膝に置いていた手をぎゅっと握り、机に頭がつきそうなくらい、礼をした。
「まだ決定ではないんですけどね」

後藤さんがそう言つて、目の前に書類を広げた。

「各ビルに雑貨と文具のテナントを入れる予定なんです。宮崎さんのところには、この内の約四分の一のスペースをお願いしたいと思つています。場所によつて規模や内容も異なると思うので、それに合わせた商品展開を今のうちから考えておいていただきたい」

まだ決まつてないから急がなくていいですよ——後藤さんは笑つてそうつけ加えた。

渡された書類には、各店舗のおおよその広さの一覧が書かれている。一度にこれだけの数の店舗を扱うのは初めてだ。

こんなにわくわくするのは何年ぶりだろう。これが決まれば寝る暇もないくらい忙しくなるだろうけど、早く手をつけたくてたまらなくなつた。

「では、明日決まり次第ご連絡します」

「はい。どうぞよろしく願います」

深く頭を下げる。

営業先をでてからも、まだ夢心地だった。足取りも軽く会社に戻ると、営業部から

わーっという声が聞こえた。

そつとドアを開けると、課長の机のそばに人が集まつている。在社している営業部のメンバーだ。

課長の前には伊勢谷がいた。この光景は何度も見たことがある。

「すげーな、伊勢谷！ 今月で二件目だぞ、新規の店舗」

ああ、やつぱり。また伊勢谷が契約を取つて来たようだ。

うれしそうな及川課長やみんなの顔を見ると、胸がぎゅっと痛くなつた。こんな嫉妬心は捨てるべきだと、もう何年も思つているのに、まだ捨てられない。

自分の机に鞆かばんを置き、後藤さんから渡された書類を取りだす。わたしにはわたしの仕事がある。初めて、伊勢谷を追い越せるかもしれないのだ。そう思うと、また胸がわくわくして来た。

「よお、お疲れ」

顔を向けると伊勢谷がいた。まあ隣の席なので当然だけれど。

「お疲れ様、それからおめでとう」

ここで祝えないほど子どもでもない、はずだ。わたしは平静を装まもつて言う。

「ありがとう」

伊勢谷はちよつと笑ひ、椅子に座つた。彼はいつでも大げさに喜んだりはしない。そ

れが余計に気に障る。わたしだったら、きっと小躍りしちゃうわよ。

そんなことを胸の中で思いつつ、次はわたしだと、書類を持って課長のもとに行った。「おお、戻ったか。どうだった?」

「最終決定は明日の会議だそうですが、ほほいけるかと」

さっきの書類を見せつつ後藤さんから言われたことを伝えると、及川課長が眉を上げた。

「これは、かなりの規模になりそうだな」

そして、わたしを見てニヤリと笑う。

「伊勢谷の鼻を明かすときが来たようだ」

ささやくような小さな声に、わたしもニヤリと頷き返す。

「決まり次第教えてくれ。本契約には同行する」

「はい!」

書類を受け取り、なんにもなかったような顔をして自分の席に戻った。決まるまでは内緒にしたい。そして決まった暁には、伊勢谷の目の前で小躍りどころか飛び上がって喜んでやるつもりだ。伊勢谷の驚く顔が目には浮かぶ。にやけているのがばれないように気をつけながら黙々と資料を作っていると、いつの間にか定時を過ぎていた。

おっと、今日は早めに終わらせようと思っていたのに。

ファイルを保存して一息ついたところで、肩をほんと叩かれた。振り返ると一美が立っている。今日は首を絞めないようだ。——よかった。

「お疲れ、奈央。今からみんなでご飯食べに行くんだけど、一緒に行かない? 月曜日だけ特別メニューをだす店があるんだって。ちなみに合コンじゃないから。ねえ、伊勢谷も行こうよ」

一美は隣の伊勢谷にも声をかけた。

ヤツが行くなら行きたくないし、それにそもそも、今夜は星を見ようと朝から決めたのだ。

「あーごめん、今日はちょっと」

断ると一美がえーっと声を上げた。

「ほんとに合コンじゃないのよ? 普通の食事だけ」

一美が言葉を重ねる。そこまで合コンの件を根に持っているわけじゃないのに。

「ごめん、用があるのよ」

「宮崎は一人で飲む方がいいんだろ」

もう一度断ったとほぼ同時に、伊勢谷がからかうように言った。いちいちムカつく男だ。

「一人で飲みなんて行かないわよ。用事よ、用事!」

元々お酒は苦手、同期の飲み会すらほとんど参加しないのに、人聞きの悪いことを

言わないでもらいたい。一人で飲みに行くような女だと、伊勢谷は思っているんだろうか。そう考えると、なぜか胸がチクリとした。

「そう。じゃあ、残念だけどまたね。伊勢谷も来られるなら連絡して」

一美はそう言うと、ドアからでて行った。

最後のメールチェックをしてパソコンを落としたのち、立ち上がってコートを羽織る。「お先〜」

隣でまだキーボードを叩いている伊勢谷に声をかけると、ヤツが顔を上げ、それから手を上げた。

「おー。お疲れ。一人で飲み過ぎんなよ」

「だから、飲まないって言ってんの」

ケラケラ笑う伊勢谷を無視して、会社をあとにした。気が立っているからか、寒さもそんなに気にならない。

駅までの道を足早に歩き、家に帰るのは別の路線に乗る。目指すのは奇しくも伊勢谷に最初に連れて行ってもらったプラネタリアムだ。そこが時間的にも場所的にも一番行きやすかったのだ。

月曜の夜でも大勢の人がいる街で、人の流れに乗って、大きなビルに向かう。時間や空席情報はスマートフォンでチェックし、すでに予約済みだ。六年で随分便利になった

ものだ。先にさつさと食事をすませ、専用のエレベーターに乗った。

屋上でおり、プラネタリアムの入り口に向かう。

「いらっしやいませ。記念品をどうぞ」

スマホの画面を見せて入場すると、ちょうどプログラムが変わった時期らしく、記念のロゴと北斗七星をかたどったキーホルダーをもらった。

開場と同時に中に入る。席は後方の真ん中の、一番いい席だ。

グッと背もたれを倒し、球状のスクリーンを見上げる。室内が徐々に暗くなり、スクリーンに映像が浮かび上がる。

そのとき、ふと、星を見る会^会のことを思い出した。一時は大勢参加していたけれど、今ではもう誰も存在すら覚えていないだろう、あの集まり。元々伊勢谷目当てで集まった女子ばかりだったから、彼が声を上げない限り誰も集まらない。

それにしてもあのとき、どうして伊勢谷はわたしを誘ったんだろう。プラネタリアムの存在を覚えてくれたことは感謝している。それだけでよかったのに、どうしてわざわざ一緒に星を見に行ったの？

音楽が流れ、スクリーンの夜空に星々が浮かび上がる。

「あ……」

その中に、小さな星の塊^{かたまり}を見つけた。すばるだ。伊勢谷の名前、伊勢谷の星。

すばるとともに、目の前の巨大なスクリーンに満天の星が映しだされた。子どものころから見慣れた暗黒の夜空――
スクリーンの星を、目に焼きつけた。
まだ頑張れる。大きな仕事もきつと決まる。これでわたしも、輝ける星になれるだろう。
待つてなさいよ、伊勢谷！

4

きれいな星をたつぷりと見たおかげか、翌朝は目覚ましが鳴る前にすつきりと目が覚めた。久しぶりに時間をかけて朝食をとり、身支度を整える。

鞆たもとに、昨日もらったキーホルダーをつけてみた。飾り気のない黒い通勤鞆に、小さな北斗七星が揺れる。

「可愛いじゃない」

まるで夜空に浮かんでいるかのようだ。

テレビの天気予報を眺め、気温を確認してクローゼットの衣装ケースからマフラーを取り出した。まだ十二月になっていないけれど、例年より気温が低くコートだけでは寒

さは防げない。コートの上からしっかりとマフラーを巻き、少し可愛らしくなった鞆を肩にかけて家をでた。

会社のビルの入り口に来たとき、背後から肩を叩かれる。また一美かと振り返ると、伊勢谷がいた。わたしと同じように、首にマフラーをぐるぐる巻きにしている。

「おはよ」

「おはよう」

他の会社の女の子たちが伊勢谷をちらちら見ているのを横目に、エレベーターホールに向かう。

「昨日は飲み過ぎなかったか？」

マフラーを少し緩ゆるめて伊勢谷が言った。

「だから飲まないって言ってるでしょ！ だいたい、飲んだのはあんたじゃない」

「俺、行かなかったし」

「あら。……そう」

なぜかホツとしている自分に、自分で驚く。

社交的な伊勢谷だけど、実のところ夜のつきあいは悪いのだ。それは社内ではよく知られたことだ。とはいえわたしには関係ないと、鞆を抱え直す。北斗七星がカチャリと音を立てて揺れたとたん、伊勢谷が声をあげた。

「それ……プラネタリウムに行ったのか？ ……もしかしてデートかっ!？」
わざとらしく驚く伊勢谷をギツと睨む。

「まさか。一人に決まってるでしょっ!」

自分で言っていて悲しくなるセリフだ。だけど伊勢谷は、そんなわたしの内心に構うことなく満面の笑みで頷いた。

「だよな」

「はあ？ だよなってなによっ」

「だって、お前、男つ気が皆無^{かいむ}じゃん」

「あんたって本当に失礼な男ね。ほっときなさいよ!」

「俺がほっといたら、構ってくれる男が誰一人いなくなるだろ」

「なっ……」

一瞬あつけにとられ、反論しようと思ったところでエレベーターのドアが開いた。満員電車並みに詰め込まれ、伊勢谷と向かい合って抱きあうような体勢になってしまった。わたしと伊勢谷の距離はほぼほに等しい。ドキドキしてしまったのは、怒りのせいに違いない。妙に速く動く心臓の音まで聞かれてしまいそうだ。伊勢谷のコートのボタンを睨みながら、そのドキドキを誤魔化^{ごまか}そうと頭の中で毒づいた。

どうせ長らくカレシなんていないわよ。でもあんただって相手がいらないのは同じじゃ

ない。まあ、隠してるのかもしれないけど。だいたいプラネタリウムだって、一緒に行こうって誘ったくせに、勝手に行かなくなったのはあんたじゃないの。

——ああ嫌だ。これじゃあわたしが、伊勢谷と一緒にきたがってるみたいじゃない。思わず頭を振ったら、頭上から伊勢谷の低い声がした。

「動くなよ、くすぐりたいだろ」

腹が立つのでさらに振ってやった。すると伊勢谷が、フンと鼻を鳴らして笑う。そしてヤツのあごがわたしの頭頂部に乗り、その重みで動きを封じられた。

「ちよ、ちよっとう」

つむじにあごが刺さってる！ 痛い！

からだを引こうとしても、乗っている頭がさらに重くなってそれもかなわない。ますます腹が立つて来て、抗議しようと思ったところでドアが開いた。伊勢谷に腕を掴まれ、満員のエレベーターから抜けだす。

「ちよっとう、痛いじゃない!」

「お前が動くからだろ。こっちだって身動きが取れないんだっつーの!」

伊勢谷は悪びれる風もなく、さっさと歩きだした。その後ろ姿を睨みながら、まだ少し感触の残る頭頂部に手を当てる。

なんなのよ、もう。

今ごろ、私鉄本社では例の会議が行われているはずだ。気になるけれど、わたしの仕事はそれだけではないので、すぐに外回りにでた。決して伊勢谷と顔を合わせづらいわけじゃない。

三件目の訪問を終えて一息ついたとき、鞆かばんの中のスマホが震えた。慌てて取りだす。相手先を確認して、心臓の動きが一気に速くなった。

「は、はい。宮崎です」

『後藤です。早い方がいいと思ったので。今会議が終わりましてね、この前お話しした通りお願いしたいと思います』

「あ、ありがとうございます！」

『いえいえ。契約書の件で一度きちんと話をさせて下さい』

「わかりました。上司と伺いたいと思いますので、後藤さんのご都合のいい日程を教えてくださいませんか。今出先ですので、再度ご連絡させてください」

震える指で鞆を探り、メモ帳とペンを取りだす。すぐ横の建物の壁にメモ帳を押し当て、電話越しに告げられた日程をメモした。

「ありがとうございます。では、折り返しご連絡いたしますので。失礼します」
電話を切ってもまだドキドキしていた。初めて契約を取れたとき以上に、気分が高揚

立ち読みサンプル はここまで

しているのがわかる。震えている指で、会社の電話番号を押す。

及川課長と話すときには少し落ち着いてはいたけれど、声はいつもより上ずっていた。「か、課長、例の駅ビル。決まりました」

『そうか、よくやった』

電話の向こうで、課長の笑う顔が見えた気がした。

「契約書の件で先方と話をしたいので、課長と一緒に行って頂きたいのですが」

先方の都合のいい日を告げ、課長の予定を尋ねる。

「では、金曜日の午後ということで、先方に伝えておきます。よろしくお願いします」
すぐに後藤さんに連絡して、アポイントを取り、ようやく人心地ついた。

顔がにやけるのを止められない。最後の営業先を回り、会社に戻って来ても、その笑みは消えなかった。

営業部のドアを開けると同時に歓声が響いた。

「すごいじゃないか！ さすがは宮崎！」

「でかしたぞ！」

その場にいた全員が拍手をして迎えてくれた。同じ光景を何度も見た。でもそのとき拍手が向けられているのは、ずっとわたしじゃなかった。そう、入社以来、ずっと。

急せきかされるようにして課長の前にでると、及川課長が右手を差しだした。